保手濱良介（ほてはまりょうすけ）先生

２年１組担任　機械科
ラグビー部顧問
2016年本校総合技術科
（機械科）卒業
（ラグビー部所属）
2021年龍谷大学理工学部
機械システム工学科卒業

高校時代は「ラグビーしかしていなかった」と言い切る。大学時代は授業をしっかり受け、レポートに追われる日々を過ごす。趣味はポケモンGO。

大学卒業後、新規採用で本校に赴任。教員２年目。

↑本校在学時の思い出を語る保手濱先生。高校生の我々に一番近い先輩だ。

高校時代に体力はつけておくべし

八Ｔ：怖い？そんなに八工走いや？他の人はどう思う？

司会２：先生が怖そうなイメージはありました。八工走は体力作りの一環としては良いかなと思います。

川Ｔ：高校卒業したら体力って落ちる一方だから、高校のうちにつけておかないといけない。働いていくなかで体力って絶対必要やから。

司会：確かに八工のパンフレットにも八工走やってて良かったと書いてますね。

川Ｔ：嫌なことも続けていくことで「あの時頑張って良かった」になる。だから意味のないことはやってないんや。それが中学生に上手く伝わればいいね。

司会：最後に何かありますか？

八Ｔ：話の中に出てきた「勉強できないんやったら工業高校行き」の話についてなんですが。

中高生って若干締め付けられているというか、コンプレックスがある人が多いんじゃないかと思います。だからこそ新しい分野に飛び込んで欲しいと思う。何かに自信が付いたら変われるから。

川Ｔ：八工に来てくれたら、いろんな意味で逆転できるでって伝えたい。工業高校はいろんな人が集まる。だから面白い。

やりたいことがある人が来ても成長できるし、見つかっていない人にはチャンスが広がると思います。

司会：ありがとうございました。

座談会を終えて

司会１（１年生記者　部）

工業高校は、ある意味、工業という実に広い範囲の中から自分のやりたいことを絞ることができる場ではないかと感じた。私は特に目標もなく生きているので、いろいろな分野に触れて目標を見つけることができたらいいなと思った。

司会２（１年生記者　藤）

工業の先生＝怖いというイメージが変わった。実際のところ、先生は皆優しい方だったし、様々な質問も気さくに答えて下さった。

また取材をした我々の将来を考える際に、参考になる話も聞けて良かった。３名の先生方、貴重なお時間を頂き、ありがとうございました。

最新機器続々導入

一挙紹介

今春、八幡工業高校の各科に新しい機器が多数導入された。各科ごとに紹介していこう（次ページに続く）。基礎を大事に学んだうえで、最新の高度な機器にも触れることができる。

機械科

→５軸マシニングセンタを使用する機械工作部の川村悠逸くん

5軸マシニングセンタ

３年生の実習で使うマシニングセンタ。プログラミングをして金属を削る機械だ。従来本校にあった３軸の機械から最新の５軸が導入されたことで、より複雑な加工が簡単にできるようになった。なんと工具の付け替えも自動だ。稼働させるためのソフトウエアも更新され、手作業でプログラミングをする必要もなくなったという。機械科主任の髙山先生は「作業効率がよくなった。課題研究で、より高度な加工ができる」と嬉しそうだ。

※５軸・３軸とは？３軸は加工物を正面に見て、Ｘ軸（横）・Ｙ軸（縦）・Ｚ軸（高さ）を同時に制御。５軸は、３軸に加えさらに２軸が付加され、加工物を人間の手で動かすことなく、より立体的な加工が可能になる。

５軸マシニングセンタ 円筒研削盤など 最新機器計７種導入

→モニターがついている普通旋盤

普通旋盤は工作物を回転させ、バイトという刃物で加工する機械。１年生から使用するなじみ深い機械だ。今回９台が新調された。

基本的な性能は従来型と同じだが、自動で工作物を測定できる機能がついた。実習では今までと同じように手作業で測定した上で、確認として使用する。

自動測定機能付き普通旋盤9台

←３次元測定機を操作する髙山海斗先生

表面粗さ計 3次元測定器

←表面粗さ計

測定機は３次元測定機と表面粗さ計の２つが導入された。

３次元測定機とは、プログラムを組み、センサーで縦・横・高さの座標を取得して計測ができる測定機だ。1000分の１ミリ単位で正確に測定できる。

表面粗さ計は、旋盤などで切削した表面の凹凸を測定する機械。マイクロ単位で測定できる。

以前より正確な加工ができる機器が導入されたため、測定もより正確さが求められる。

ホブ盤

→３年生の実習で使用するホブ盤

ホブと呼ばれる刃物を回転させて、歯車を作る機械。

歯車の歯と歯の間の長さを測るためにも使用される。

円筒研削盤 平面研削盤

→平面研削盤を使用する上路くん

円筒研削盤と平面研削盤は工作物の表面を綺麗にするための機械だ。機械工作部の上路悠斗くんは「切削条件を正確に設定できるため、面がより綺麗に仕上げられる」と語った。

新しい機器が導入されデジタル化が進んだことで、自動で作業や測定ができるようになる部分が増える。

しかし基本を知らなければ使いこなせない。基礎基本をしっかり身につけてから、上級学年の課題研究などの授業で活用されるものも多い。授業や部活で「ものづくり」に挑戦していこう。（都）